

今号より、独身の広報委員が「寺院における家庭生活」をテーマに独自の視点からレポートし、自身の婚活への糧としていきます。

家族で拓く、寺檀の大地

全曹青広報副委員長 倉島隆行(三重第一曹青)

北

海道に位置する当寺の特徴としては、他の地域に比べて行事が多いことが挙げられるかもしれませんが、少なくとも月に一度は何らかの法要を行っておりますから」

遙か北の空の下から、受話器を通して岩井淳一住職の穏やかなお声が届きます。昨年の私の晋山式以来、先輩諸老師から「早く嫁を迎えろ」とのご忠告をいただく機会が増えました。山内盛事を無事終えた今、自分自身の「これから」を夢想して、脳裏にまず浮かんだのが拈華山菩提寺のことでした。北海道の札幌市に近い空知の南部に位置し、千歳川と夕張川に囲まれた南幌町にある同寺は私が住職を勤める塔世山四天王寺(三重県津市)の末寺にあたり縁深く、温暖な伊勢の国に暮らす自分には想像もつかぬ北国の寺院の有り様に、前々から関心を抱いております。厳しい大地に曹洞宗の教えを根付かされた、ご住職とご寺族の生の声を伺いたいとの思いがあったのです。

明治2年の廢藩置県によって、蝦夷地から北海道へと改称されて以降、多くの開拓使の努力によって、広大な大地の上に人の営みが築かれて参りました。菩提寺創建の契機となった伊勢開拓団が海を渡ったのは明治27年。約三十家族からなる開拓団には、当時の四天王寺住職・鈴木天山禪師(1870~1941 總持寺独住十世・永平寺六十九世)の任を受けた旭地了寛尼僧が同行しておられました。厳しい冬や頻発する洪水、熊の脅威の中、了寛師の粗衣粗食に耐えながらの托鉢によって、菩提寺の礎となる草庵が建立されたのです。菩提寺の歴史は即ち南幌町の歴史でもあり、創建の逸話も同寺ではほんの1世紀前の出来事に過ぎません。創建から長い歲月

を経た本州の寺院と異なり、境内の隅々から地域の人々の心の中にまで、歴代住職の苦勞や思いが今なお強く息づいているのです。

「この地に人が定住するまでには厳しい試練が幾度もありました。寺は開祖の跡を継いだ二世・原天降老師、三世・吉村諦真老師という気骨ある禅僧に恵まれましたが、その後は生活のあまりの貧しさに耐えられず、村を後にする住職候補も多かった



と伝わります。私の祖父である四世・岩井達道の代になって、初めて住職に夫妻を恵まれたと村民に大いに喜ばれました。四世寺族・岩井スエは村の子供たちを預かる託児所を開設し、病院勤務経験を活かすなどして寺と地域の発展を助けてきました。そもそも当寺は開祖から尼僧であり、元来女性の働きが大きいのです」

そう言って屈託無く笑われる岩井住職。共に土

地で汗を流し、育った作物を分け合った関係があるからこそ、現在の菩提寺と地域の人々との強い結びつきがあるのでしょう。

開祖から数えて六世とされる岩井住職が、駒澤大学で共に学ばれた勝江さんを伴侶に迎えられるのは24歳の時。それまでお寺というものに縁の無かった夫人にとつて、寺族としての生活など思いもよらなかったであろうことは想像に難くありません。

「こちらに来るまでは、お寺のお勤めといっても自分が何をすればよいのか分かりませんでした。お檀家さんへ細やかに気を配る義母の背を見て、自分もこうあらねばならないのだと感じたのを覚えております」

菩提寺では昭和27年に四世・達道老師が遷化されたおり、学業中であつた五世・岩井清淳師が戻られたといえます。こうしたご住職の家族ぐるみでの尽力が、どれほど地域に安寧を与えてきたことでしょうか。誠に寺院が僧籍にある者だけで守られるものでないことを物語るお話だと思えます。

「お寺に世間話に来るのが楽しいと言つてくださる方もみえます。私も縁あつてこちらに来て20年近くになりますので、今はもう“自分のお寺”という気持ちになつております」

電話の向こうの勝江さんの声をお聞きし、観音さまのように人々の話を受け止められるお姿が目蓋に浮かびました。菩提寺さまに寺族のこれからについて思いを巡らす機会をいただけたことに感謝すると共に、私自身にも良き縁が訪れることへの願いが、一層募りました。